

文部科学大臣賞

「本は世界を変える」

沖縄尚学高等学校附属中学校 3年

島田 葉子

「私は将来、本で世界を変えたい。」小学5年生の時、私は学校のスピーチでこう語った。本を通じて日本の文化を紹介して異文化交流を図れば、互いに優しくなれて、平和な世の中になるかもしれないと思ったのだ。

そして今、私は日赤の語学奉仕団という組織で、日本語の絵本を英語に翻訳して必要とする国に送るボランティアをしている。中学生の団員がいなかったので、私の受け入れについて役員の方々が随分話し合ったださったそう。実際に活動を始めても、大人ばかりの中で自分が役に立てるのか心配だった。

そんな中、私は本が贈られる国々について知らなければいけないと思い母が見つけたカンボジアでのスタディーツアーに参加した。

ツアーの目的は情操教育のない現地の小学校で子供達と音楽や体育を通じて交流をすることだったが、カンボジアの衛生環境は悪く、虫歯や感染症が蔓延しているため、歯ブラシや石鹸、タオル、そして学校で使うボールなどの寄附も望まれ、驚いた。思い切って日赤の団員の方々にメールで呼びかけた所、スーツケースから溢れる程の寄附が集まって嬉しかった。そして自分が翻訳したものも含めて、何冊かの絵本も持たせてもらった。皆に期待され、どんな子供達に会えるのだろうかとわくわくしながら私はカンボジアへ旅立った。

訪れたのは世界遺産アンコール・ワットで有名な、シェムリアップという町だ。中心部では不自由さを感じることはなかったが、村の小学校に向かうと私は愕然とした。

道路は舗装されておらず、赤土のまま。小学校は簡素な造りで電灯はなく、トイレは自分で水を汲んで流す仕組みだった。ハエが飛び交う学校には、家の手伝いであまり学校に行けず留年してしまったために私より年上の人すらいた。私は日本で快適な生活をしてきた自分の考えは甘かったのではないかと悔いた。

しかし、私が持って行った鍵盤ハーモニカで音階を練習したり、日本の運動会を再現して玉入れなどを楽しんだりした後、金の折り紙で作ったメダルとトロフィーを渡すと、子供達はオリンピックで優勝したかのように喜んだ。カンボジアで日本の文化を楽しむ子供達の笑顔で、私は自分の活動の意味を少しだけ知った。

私が翻訳した絵本は他の物品と一緒に渡したので、子供達の直接の反応は見る事ができなかった。

た。だがきっと、あの薄暗い教室で開く日本の絵本は子供達の目に鮮やかに映ただろう。世界の人が対等になるには、「つくり出す」支援が必要だ。私は絵本を通じて、子供達に笑顔を与えられたと信じている。これを夢、そして未来へとつなげるのは、彼らの役目だ。

私はこれからも、カンボジアの子供達の人懐っこい笑顔を心にとめて、絵本翻訳の活動を続けていきたい。本は世界を変えると信じ続けて。